

〔書評〕

フィリップ・C・アーモンド著・奥山倫明訳

『英国の仏教発見』

吉永進一著

『神智学と仏教』

本稿では、①フィリップ・C・アーモンド著・奥山倫明訳『英国の仏教発見』（二〇二二年七月、法蔵館）と、②吉永進一著『神智学と仏教』（二〇二二年七月、法蔵館）の二書を紹介する。①はヴィクトリア期、つまり主に一九世紀英国における仏教受容、②は一九世紀から二〇世紀への転換期における日米の「東洋思想」をめぐる動向をそれぞれ主題とする。以下、①②の順で目次と各章の要略を示し、最後に若干の所感を記す。

末村正代

①フィリップ・C・アーモンド著・奥山倫明訳『英国の仏教発見』

本書は、オーストラリアのクイーンズランド大学名誉教授で、オーストラリア人文学アカデミー・フェローも務めるフィリップ・C・アーモンド氏 (Philip C. Almond) の著書、*The British Discovery of Buddhism* (一九八八) の全訳である。本書の目的は、世界の覇者として繁栄を享受していたヴィクトリア期の英国が、植民地で見出された雑多な事象からい

かにしてひとつの体系を構築したか、端的には、ヴィクトリア期英国による「仏教 Buddhism」「創造」のプロセスを明らかにすることにある。外交官や宣教師らによる膨大な資料から争点の遷移をたどることで「仏教」概念の成立を跡づけると同時に、「仏教」創造プロセスに参与した言説や表象が英国自身のいかなる社会的・文化的文脈を反映していたかが分析される。

はじめに

序章

第一章 仏教の発見

第二章 仏教と「東洋精神」

第三章 ブッダ——神話から歴史へ

第四章 ヴィクトリア時代人と仏教の教義

第五章 ヴィクトリア時代の訓戒と仏教の実践

第六章 「盲目の異教徒」？

結論

第一章「仏教の発見」では、主に一九世紀前半を対象として、「仏教」発見から「仏教」概念成立に至るまでの経緯が論じられる。具体的には、一八二〇年代に植民地支配を通じて収集された多種多様な情報が「ブッダの宗教」＝「仏教」として実体化され、三〇年代半ばにアジアの大半を覆う信仰

を定義する言葉となり、一九世紀半ばには発祥の地や開祖、先行宗教との関係がある程度特定されるまでの経緯、雑多な事象がひとつの「仏教」内へ収斂していくプロセスが詳述される。次いで、一九世紀半ば以降には、資料収集の進展によって文献の対象物化していく「仏教」が、現場のアジア諸国から西洋の机上へ移行する局面が訪れることが示される。

第二章「仏教と「東洋精神」」では、一九世紀後半を中心とした言説から、当時の「仏教」理解が論じられる。中流階級の読書への関心増大、定期刊行物の増加、知識拡大によるイデオロギーの動揺・懐疑・多元化などを要因として文献上の「仏教」が理想的宗教とみなされていく流れと、対照的に、根深いオリエンタリズムを背景として現実の仏教が頹廢形態と断罪されていく動勢が示される。次いで、当時の「仏教」理解には、受容と拒絶、同一性と異他性という両極があり、とりわけ、知的に劣る点や過剰な誇張癖、幼児性、怠惰、無気力、悲観主義などが東洋精神の異他性と見られていたと指摘される。

第三章「ブッダ——神話から歴史へ」では、ブッダに関わる言説の変遷が論じられる。はじめに、語源学的手法で各地の神々と同一視されていた神話的ブッダが、実在する歴史的ブッダへと移行した道筋が示される。また、これと関連して、

生存年代がより後世に位置づけられたことによって歴史上で探究可能になった点、伝記の誇張や脚色には否定的であったものの、人格は理想的・英雄的人間像として肯定的に受容された点が論じられる。とくに、カーストを廢して平等を実現した社会改革者としての一面は、宗教改革者ルターと比肩すると評され、当時の反カトリシズム論争において、ルターとブッダ、プロテスタントと仏教という構図が利用されたことが指摘される。反面、その姿が社会主義を助長する懸念から、改革者ブッダの表象が後に修正された点にも触れられる。

第四章「ヴィクトリア時代人と仏教の教義」では、悲観主義・業と転生・宇宙論・哲学との関係・無神論・涅槃が主題として取り上げられ、それぞれの仏教教義に対するヴィクトリア期の人々の態度が論じられる。いずれにおいても肯定と否定の二極が存することを前提としたうえで、エポックメイキングであった進化論と仏教がともにユダヤ・キリスト教的伝統、つまり人類のもつ質的独自性を脅かすものとして批判されたことを示す「業と転生」や、永遠と消滅という宗教における本質的主题と関係し、最大の関心と論争的的となった「涅槃」の項目など、ヴィクトリア期に展開された多彩な議論が紹介される。

第五章「ヴィクトリア時代の訓戒と仏教の実践」では、前

章の教義につづいて、仏教の道徳と実践に関する言説が取り上げられる。道徳については、仏教の倫理性が高く評価された反面、出家主義を採るため実社会では効力をもたず、善の根拠としての神をもたない無神論に立つため個人主義的で利己的であると解釈されたことが示される。他方、実践については、瞑想の受動性が「行動の強調」というヴィクトリア期の宗教的特徴に反するものとして解されたと説明される。

第六章「「盲目の異教徒」？」では、絶えずキリスト教と比較され、「キリスト教の目盛りによって」価値判断を下されてきたヴィクトリア期仏教の歴史が改めて強調される。つきまとう同化と拒絶の両極もキリスト教を基準として算出されたものであり（プロテスタントイニシヤムを基準とする場合とカトリシズムの場合では異なるが）、仏教をはじめとする東洋諸宗教は、たとえ同化されてもキリスト教への準備段階という枠組みからは脱し得なかったと結論づけられる。

②吉永進一著「神哲学と仏教」

本書は、近代仏教史・秘教思想史研究者の吉永進一氏が二〇〇三年から二〇一八年に発表した論考をまとめたものである。著者は近代仏教史研究を黎明期から支え、今日の礎を築いた最大の貢献者のひとりとして数多くの共著をもつが、

本書は初の単著となる。

本書はタイトル通り、神智学と仏教の関係を問うものである。一九世紀から二〇世紀への転換期、西洋秘教と東洋思想を結びつけ、「秘密仏教」と自称した神智学が、アメリカの宗教史と日本の仏教史にどう位置づけられるのか、その役割とグローバルな具体相が解明される。著者は序章で①「英国の仏教発見」を引用し、この記念碑的著作においてさえ、神智学の記述が一箇所しか見られないと述べる（その唯一の言及箇所でも、神智学は「決して仏教ではなかった」とされる）。文献仏教にも現実仏教にも属さないスピリチュアリズムやオカルティズムは、たとえその構造に仏教的要素を含んでいても、「仏教」の埒外と見なされていた。神智学もそのひとつである。しかし実際には、「仏教」と非仏教に明確な境界はなく、著者の言葉を借りると、「混淆はつねに起こっていた」（二三八頁）。本書は複眼的にこれを立証する。

序章 似て非なる他者——近代仏教史における神智学

I 神智学の歴史

第一章 チベット行きゆつくりした船——アメリカ秘教

運動における「東洋」像

第二章 近代日本における神智学思想の歴史

第三章 明治期日本の知識人と神智学

必要性が論じられる。

I 第一章「チベット行きゆつくりした船——アメリカ秘教運動における「東洋」像」は、所収論文でもっとも古い（二〇〇三年）。「その頃はまさか近代仏教史研究に深入りするとは思っておらず、趣味的に書き流した雑文ではあるが、研究対象も今と変わっておらず、構築主義的なスタンスもあり変化していない」（二七〇頁）という言葉通り、本書を一貫する主張、すなわち、西洋が文献の対象物としての仏教から離れ、直に参入する最初の道を拓いたのは神智学であったとの見解がすでに看取できる。アメリカがヒマラヤ・チベットに魅了される動因の考察など、神智学研究への期待感に満ちた論考である。

I 第二章「近代日本における神智学思想の歴史」では、アメリカのメタフィジカル宗教と日本の霊性文化の関係が論じられる。欧米の秘教研究とメタフィジカル研究、近代日本に点在するいくつかの霊性文化、メタフィジカル宗教の源泉としての神智学の歴史と一九三〇年代以降の群小グループたちが順に紹介される。次いで、日本の霊性文化と神智学の具体的交流、断片的だが伝統と直につながりやすいという日本の神智学特有の傾向が示され、もっとも積極的な神智学支持者であった昭和期の三浦闕造について詳述される。

II 仏教徒の交錯

第一章 仏教ネットワークの時代——明治二〇年代の伝道と交流

第二章 オルコット去りし後——世紀の変わり目における神智学、新仏教徒

第三章 平井金三、その生涯

III 霊性思想と近代日本

第一章 仏教雑誌のスウェーデンボルグ

第二章 大拙とスウェーデンボルグ——その歴史的背景

第三章 らいてうの「天才」

終章 神智学と仏教、マクガヴァンとその周辺

序章「似て非なる他者——近代仏教史における神智学」は、本書の主題、神智学と仏教に関する総論である。神智学の創始者であるブラヴァツキーとオルコットの思想的特徴と仏教との関わりからはじまり、初期欧米仏教における神智学的要素、神智学とも連動していた日本仏教の海外進出と国際ネットワーク、先行する英語圏の研究の紹介とつづく。最後に、トマス・ツイード「アメリカ人の仏教との出会い」を援用しつつ、起源の面影をたたえたより純粹な「本物」を主人公とする従来の仏教史を脱し、ツイードのいう仏教「シンバ」も含むような、混淆性を認める新しい近代仏教史を打ち立てる

I 第三章「明治期日本の知識人と神智学」では、明治期に焦点を当てて、日本人と神智学との出会いが論じられる。神智学に関しては、スピリチュアリズムとの関係、反キリスト教の文脈で社会改革運動と高い親和性をもつこと、西洋にとつては身近な東洋宗教・西洋秘教への入口であり、東洋にとつては自らを高く売り込む手段であったことが示される。日本と神智学との関わりについては、戦略的に作り出されたとも言える欧米仏教ブームとその盛衰が詳述される。次いで、姉崎正治の丁酉懇話会から婦一協会への歩み、日本で国民道徳論としても機能した神智学ポイント・ロマ派、来日したポイント・ロマ派の神智学徒ステイーブソン、道徳の再活性化を目指した成瀬仁蔵が紹介され、この時期の神智学が「道徳を裏から支える超越的装置」として機能していたことが指摘される。

II 第一章「仏教ネットワークの時代——明治二〇年代の伝道と交流」は、前章で触れられた欧米仏教ブームが主題である。とくに、明治二〇年代の「反省会雑誌」、「海外仏教事情」*The Bijou of Asia* など、雑誌中心の仏教メディアを通じて日本仏教の海外交流について詳述される。はじめに、アメリカにおける仏教シンパが、既成宗教や社会体制に批判的、個人主義的で人間中心的、政治的には進歩改良主義という特

徴をもつことが示され、代表的人物として、ブラヴァツキー、オルコット、フランジ・ダーサの折衷的仏教が分析される。こうした欧米仏教と日本仏教との出会いとして、平井金三のオルコット招聘運動、松山松太郎とウィリアム・Q・ジャッジのやりとり、海外宣教会初の支部を開設したチャールズ・フォンデスの活動が紹介される。

II 第二章「オルコット去りし後——世紀の変わり目における神智学と『新仏教徒』」では、明治三〇年代を対象として、引き続き日本仏教と神智学の関係が論じられる。神智学をはじめとする西洋秘教主義に見られる三つの特徴、平井や松山と神智学との接触が説明され、次いで「新仏教」の活動が取り上げられる。若手仏教者がキリスト教との融和へと舵を切ることで自由討究の時代が訪れたこと、そのなかで円了の合理的仏教理解に基礎を置き、中西牛郎や平井の独自の・折衷的仏教理解を経て、明治三〇年代、改めて宗教独自の領域を問う田岡嶺雲や古河老川らが登場したことが詳述される。

II 第三章「平井金三、その生涯」は、あとがきにある通り、著者の近代仏教史研究の直接的な端緒、平井金三を論じる章である。平井資料の発掘は、二〇〇四、二〇〇六年の科研費研究「平井金三における明治仏教の国際化に関する宗教史・文化史的研究」を導き、平井が正当に評価される素地を作っ

イミシングの分析、スウェーデンボルグ協会とのつながりの経緯が示される。次いで、スウェーデンボルグ以前の思想遍歴を踏まえたうえで、協会でのスピーチと関連著作が考察され、大拙の創造的解釈がその「他界」論に見られる点が指摘される。

III 第三章「らいてうの「天才」」では、平塚らいてうの「原始、女性は実に太陽であった」における「天才」の分析を通して、その靈性思想が論じられる。らいてうの「天才」には二つの定義、主体的・能動的に精神集注で獲得する境地と、催眠実験で出現するような受動的に与えられる境地があると仮定され、彼女が前者のみを称揚したのではなく、後者にも畏敬・憧憬の念を示していたと結論される。さらに、靈性思想の源泉として、網島梁川や釈宗活のもとでの「見性」体験が紹介され、女権運動発生時のより人間的な靈性思想を模索していらいてうの姿が描かれる。

終章「神智学と仏教、マクガヴァンとその周辺」は、大乘協会を設立し、雑誌 *Mahayana* を創刊したウィリアム・モンゴメリー・マクガヴァンと、その母の遍歴を軸として、世紀転換期の大乘仏教をめぐる状況が論じられる。東洋学と神智学が圧倒的優位であった時代に神智学がいかにして大乘の窓口となったかが詳述され、アメリカが大乘に期待した点と

た。英学校生、仏教活動家、英学塾オリエンタルホール主宰、オルコット招聘の中心人物、臨済宗僧侶、シカゴ会議で成功を取めた弁士、総合宗教論の提唱者、ユニテリアン、心靈研究家、三摩地会主宰という先進的で多面的な平井が描かれる。

III 第一章「仏教雑誌のスウェーデンボルグ」ではII 第二章が引き継がれ、合理的仏教理解の流行後、科学に還元され得ない信仰の問題と対峙した日本仏教が論じられる。はじめに、一九世紀半ば以降の欧米におけるスピリチュアリズムの隆盛、スウェーデンボルグの再活性化、西欧秘教思想の再発見と東洋思想への関心の高まりが詳述され、ブラヴァツキー、オルコット、フランジ・ダーサ、それぞれのケースに触れられる。次いで、日本仏教の破邪顕正によって成立した合理的仏教理解と信仰の領域をつなぐ人物としてスウェーデンボルグが紹介されたこと、とりわけ、ダーサが自らの仏教雑誌 *Buddhist Ray* で発表した創造的解釈が合理と信仰の空隙を埋める思想として受容されたことが示される。

III 第二章「大拙とスウェーデンボルグ——その歴史的背景」では、スウェーデンボルグ関連の翻訳と著作によって第一人者となった鈴木大拙のスウェーデンボルグ論が論じられる。前章の古河らによる神秘主義待望論、古河らの議論と大拙の著述とのリンク、大拙がスウェーデンボルグを知った夕

して、心身を操作する行法や普遍的宗教が挙げられる。

以上、①『英国の仏教発見』と②『神智学と仏教』の要略を示した。①で明らかにされたように、ヴィクトリア期英国における「仏教」創造の背景には、科学的合理主義の勃興にしたがって増大するキリスト教への疑義があった。「仏教」は、キリスト教ではない何かを希求する人々に代替を提供し、燃るキリスト教への不満を回収する役割を担ったが、他面、決してキリスト教を超えることがないものとして創造された。さらに、プロテスタントイズムとの類似（道徳）が高く評価され、カトリシズムとの類似（実践）が批判の対象となったことからわかるように、キリスト教内部の反カトリシズム思潮も映し出している。著者自身が述べる通り、本書は上述のような仏教版オリエンタリズム解明の試みであった。

そして二〇世紀への転換期、産み落とされた「仏教」は、一方的な価値判断によって作られた枠組み——西洋の机上にある理想的文献仏教と現場のアジア諸国にある類層的現実仏教——を脱し、東西の靈性思想も取り込みながら、より複合的に展開する。キリスト教から離反する人々に門戸を開いたのは、こうした複合体としての「仏教」であった。とくに、アジア諸国に進出した神智学は、各地の現実仏教の近代化や復興に直接的・間接的に関与して勢力を拡大した。日本仏教

の場合は、復興を図って戦略的に神智学を利用した面もあり、双方向的な影響関係が成立していた。②の学術的意義は、これまで既成宗教とは区別され、過小評価されていた神智学を発掘し、その役割とグローバルな動態を紹介し、日米の近代仏教史上に位置づけた点にある。

本稿執筆時、吉永進一先生ご逝去の報に接しました。生前のご厚情とご学恩に心より感謝申し上げますとともに、謹んで哀悼の意を表します。なお、先生が残された多くの業績は、栗田英彦氏の手でまとめられ、The East Asian Network for the Academic Study of Esotericism のウェブ사이트 (<https://eanasc.com/>) に掲載されています。

① 二〇二一年七月刊、法蔵館、文庫判、

四〇〇頁、一三〇〇円＋税

② 二〇二一年七月刊、法蔵館、四六判、

三七八頁、四〇〇〇円＋税

(南山宗教文化研究所研究員 すえむら まさよ)